真砂屋お峰

有吉佐和子

有吉佐和子

真砂屋お峰

中央公論社

真砂屋お峰（まなごや）　©一九七四

昭和四十九年　九月二十五日　初版
昭和四十九年十一月二十五日　四版

著　者　有吉佐和子

発行者　高梨　茂

印刷所　精興社

発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二ノ一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四

検印廃止

真砂屋（まなごや）お峰

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

一

真砂屋と書いて、まなごやと訓む。先祖は勢州と紀州の境というからよほどの山奥から出てきたのだろう、権現さまの大江戸打入り後まもなく下ってきた。当主七郎兵衛は江戸で八代目になる。その前のことは言いたがらないところをみると大方日高の山奥で炭焼きでもしていたのだろうが、徳川さまの御時世になって以来の材木屋だ。まあ人に知られるようになったのは振袖火事の後だろう。なにしろ百五十年から昔の話だが、あの明暦年間は火事続きで、上は公方さまの天守閣から下は伝馬町の牢屋まで火を噴いたというのだから、今日までの語り草よ。人死も五万や十万ではきかなかったそうじゃないか。大江戸八百八町が火の海になったというから豪儀なものだな。夜空に金の砂子を撒き散らしたようだったとも聞いたぜ。二日間というもの燃えに燃えて、武家屋敷も町屋も区別なく焼け崩れ、見渡す限りが曠野になってしまった。犬公方さまの前だから家綱さまの御治世だったが、俺たちの祖父の話では江戸が盛り上ったのはその後だとよ。大火事で何もかもなくなった。当時は食物にも事欠いて、御公儀は粥施行をなすったそうだが、長い長い行列ができたとよ。なに真砂屋だって俺たちの石屋だって変るところはなかったろう。

明暦の大火の後だよ、今の江戸ができたのは。大目付さまで御府内の総絵図を作らせた。その

ときの規矩術（測量学）は和蘭陀式で、家にもある遠近道印の版画がそれだ。広小路というのはそのときできた。道幅をひろくして火除小路にしたというわけだ、お前もそんなことは知ってるだろうが。建前もすっかり変って、そのとき以来桃山風の美々しい御殿がなくなった。金箔つきの瓦屋根がそれまでの武家屋敷では珍しくなかったというぜ。それが大火この方は牡蠣殻葺きが御公儀の御奨励さ。長屋は板葺に泥を塗ってな、火の用心が江戸中の合言葉になって大工は家を建てるには鳶という火消人夫の都合まで考える。万一の場合に突き崩せるようにというので建てるのだから大工の身にとっちゃさぞ妙な具合だろう。お前も叩き大工に一度はなろうかと志したのだから俺が話してやるまでもないが。

しかし真砂屋が俄かに身上を肥らせたのも、俺たち石屋がまず御町内で長い間大きな顔していられたのも、考えてみれば振袖火事のおかげだろうな。神田白銀町から柳原まで七ヵ町に高さ二丈四尺、東西十町余の堤を築いた。そのとき積み上げた石の大方を扱ったのが俺たちの御先祖さまだ。祖父の代までは、火除け堤の御作事で家は大層もなく潤った。日本橋南の万町から四日市まで、高さ四間、川沿いに東西二町半、飯田川添いの堤もそうだ。俺はあの辺りに出かけるごとに、こういう作事が今に到るまで続いていたら、俺たちはお蚕ぐるみで育ってただろうと思うよ。

今日の真砂屋と俺たちの家の違いが、考えてみれば文字通り商うものの違いだな。材木は燃えるが、石は燃えねえ。明暦以後も、辻ごとに天水桶を積み上げの、鳶も威勢よく揃えたが、火事と喧嘩は江戸の華だ。風のある夜に半鐘の鳴らない冬はない。火消しが飛びまわって水を掛けの、屋台崩しのと仕末をしたあとが普請だもの、焼け肥りに肥るのは材木屋と大工の元締めばかりだ。

どんなに巨い柱でも火にあえばひとたまりもなく燃えてしまうが、土台石てえものは燃えないよ。土台石が火で亀裂の入るまでの大火事は、まず振袖火事から以降には数えるほどしかありはしない。

お前がこの家を出て大工になる気でいることは俺もとうから察していたが、しかしもう一度考え直してみる気はないか。叩き大工は所詮は職人で、一生人に使われるだけだ。大工一日の手間賃がたった四匁二分でそれに米代が一匁二分つく。それも一年三百六十五日のうち節句ごとに休みがあって風の日も雨の日も仕事はなくなるよ。どんなお屋敷を建てたからといって、大工が自分の蔵を建てた話は聞いたことがない。職人は損だよ、お前。金儲けなら商人だ。それは家のように左前になった店で育ってみれば商人に愛想をつかすのも分らないじゃあない。俺もお前と同じ家に育ったのだからね、分ってるさ。だが俺は、七年ばかりお前より先に生れたから石屋が少しは栄えていた時代を見ているもので、お前のように気短かにはなれないのだ。親爺が死んで自分が算盤を置いてみると、細々ながら小さな庭石を売るだけでも、石工より職人よりは身位が高いだけ幸せだという気がしてくる。長男に生れなかったお前には分らないかもしれないが、家と土地がついているだけでも流れ歩きの職人より運がいいと言わなくちゃならない。それだけに軒の傾きかかったこの店を建て直さなくては御先祖さまに相済まないという気が日増しに強くなってくる。

小糠三合持ったら婿に行くなという文句は俺だって知っているよ。俺は何も弟のお前を売ろうというのじゃない。お前が叩き大工になって一人で生きていくというのは確かにお前の勝手だが、

職人を使っている俺の立場からすれば、兄として弟のお前を大工などという職人にはしたくない。どんなに腕がよくたって職人は所詮は使われる身なんだ。火事さえあれば仕事には事欠くまいが、叩き大工はどんなに働いても、腕がよくても、収入の上前は棟梁にはねられる。日銭は入っても宵越しに使うだけも残らないのだ。江戸っ子という言葉の威勢よさに惑わされちゃあいけないよ。江戸っ子というのは吹けば飛ぶような手合いのことを人がおだてて呼んでいるだけだ。代々暖簾を下げている商人が江戸っ子と呼ばれないのがその証拠だね。

さてまた話を真砂屋に戻すけれども、江戸に代々栄えていながら真砂屋が日本橋の越後屋ほども派手に名の売れてないのは何故だと思う。今度お前のことがあって俺も調べてみたのだが、なるほど商人としては恐れ入るほどよくできた店だ。商人は第一に目立たぬがよし、というのが真砂屋の心得だとよ。似たような土地から出てきても紀国屋文左衛門などは真砂屋に言わせれば商人にあるまじき振舞いで、一代で潰れたのが当り前だということになる。紀国屋文左衛門は名を売りすぎた。明暦の大火の後に木曾へ駈けつけて有り金はたいて山を買い、材木を伐って江戸へ送ったという話は、紀国屋にも奈良茂にも、河村瑞賢にもある話だが、真砂屋だって勢州紀州へ飛んで帰って材木を買い占めたに違いないのに、それが世に聞えてないのは、商人は名を売るよりも品を売って実をとれという代々の言い伝えがあるからだ。大火の後も武家屋敷の普請には一切手出しをしていない。町屋ばかりが相手なのだ。文左衛門が徳川さまの御用人に取り入ったのも真砂屋に言わせれば失敗の元だという。賄賂を積んで利の厚い取引きをするのは真砂屋の算盤には無い商法らしい。火事の後は、棟割長屋の住人たちを家主ぐるみ本所や愛宕下の寮などへ

引取って、一切合財面倒を見るから、家主も店子も真砂屋のことは忘れない。江戸中の長屋の木材が、みんな真砂屋から出ているのは、お前も大工の端くれで修業を始めたばかりなら知っているだろうが、どうだ。力のある者には近よらぬがよしというのも、毎朝あの店では丁稚小僧まで眠気ざましに暗誦している真砂屋家訓条々の一つだそうだ。取引先には武家屋敷に出入りのある棟梁を嫌って、素町人を相手に限っているのだが、まず江戸というところは徳川さまの御威光で、焼けても焼けても性こりもなく人が寄る。江戸っ子という名の貧乏人が住む長屋も棟を連ねている。相手が小長屋の家主でも、江戸中の長屋を見渡せば真砂屋の身上のほども分ろうというものだ。本所や愛宕下の他に下谷にも向島にも大層もない大きな寮があるそうで、広い庭には樹木が育ってまるで森だと大形に言うのがいるが、俺は真砂屋の考え方がようやく分ってきた。あれは火除地（防火地帯）だよ。大目付の規矩より先に、真砂屋は初代二代目あたりからもうそんなことをやっていたのだ。寮だから、いくら地所を持っていても、店の間口のように公役（税金）がかからない。大火があれば家主たちを店子もろとも避難させ、家が建つまで住まわせるのだから、大した雑作も必要がない。寮といっても遊女屋やお大尽の寮とはわけが違う。お武家の下屋敷とも違うのだよ。別宅にして妾を囲った主人もいないようだよ。万事がつましくて、それはまあどこの家でも商人なら同じことだが、真砂屋はそれが主人から丁稚の末まで通っているようだ。

甚三郎は、兄がまるで自分のことのように得意がって真砂屋の自慢話をしているのを、ただ黙って聞いていた。唐桟の縞木綿を伊達に身幅せまく仕立てたものを着ているので、正坐していて

もともすると膝前が割れてくる。甚三郎はときどき裾前を右に引いて、しかし兄の前で正坐を崩さなかった。落ちぶれていても享保の頃までは栄えていた石屋である。暖簾は損んで端が縷れているけれども、甚三郎が子供の頃にはまだまだ商家の誇りが生きていたから行儀の躾は厳しかった。長男の前では、弟はまるで武家の主従のように身分差別をつけられて育っているから、兄である石屋重右衛門の前では話が終るまでともかく立つこともできない。しかし、甚三郎は兄の話には真実退屈していた。まずこういう話はこの一月ばかりほとんど毎夜のように聞かされているからで、聞く身はこれほど飽きているのに、よく同じことを繰返して喋れるものだと甚三郎は感心していた。講釈師の口調とだんだん似てくるのも可笑しかった。話を繰返すごとに、重右衛門が熱をおびて語る場所が一定し、少しずつ少しずつ話が大げさになってきている。講釈師が見てきたように喋る理由が肯ける。幼い頃は兄弟揃って新右衛門町にある寺子屋に通ったから、二人とも漢語をかなり解するのである。浪人が殖えても決して減らないという泰平の御世であったから、寺子屋や町道場は江戸御府内いたるところにあって、だから町人で一丁字も目にない者というのは、よくよくの貧乏人に限られていた。甚三郎は子供の頃から読み書き算盤みんな好きで寺子屋の師匠にはことの外可愛がられて育ったが、大工になろうと決めてから確かにそれが役に立っているのが分る。まず文字の読めない大工たちの中で、甚三郎は棟梁が請負ってきた作事の文書が誰より先に読めたから、まるきり親代々の叩き大工や、昨日今日江戸へ出てきた田舎の喰いつめ者や土百姓上りより仕事をやるのには遙かに有利だった。それに軒は傾いても日本橋通りにれっきとして店を構えている石屋の息子と分れば、どこの棟梁も一目おいてくれる。兄の重右衛

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

門が言うほど自分の立場が惨めなものとは思わなかった。なるほど一日働いて五匁四分しか受取れないのは本当だが、いつまで人の指図で釘だけ叩いているものかという気概が甚三郎にはある。

黙っている甚三郎をいいことにして、重右衛門の話はいよいよ熱を帯び、ひとりで喋り続けていた。見当もつかない身上持ちの真砂屋が、左前になった石屋がかまえている日本橋などという一等地に店を持たず、下駄や雪駄を商う小店のひしめいている浅草花川戸なんぞに本店を持って、そこから少しも動こうとしていないことに、重右衛門は舌を巻いて驚いているのだ。あんな場所にいるのだもの大名貸しに狙い落される心配もない。つくづく俺は怖れ入ったよ。

大名貸しというのは、財政の窮乏している幕藩の大名たちが景気のいい富商を見込んで借金を申入れるものをいう。すでに武家に取入って利権を得ている弱身もあり、あるいは直接の藩主であったりするから、貸せと言われれば町人の方には断りを言う口実がない。下手に断れば何しろ権力というものがあるのだから何を言い出して闕所（没収）にしてしまうか分らない。見込まれたら最後なのだった。担保さえも取れずに、大名の家名に対する信用貸しになり、年貢とりたて直後に半分返済されても、また暮れには前の倍額を借りにくる。そうした貸金が累みに累むと、どんな利権を代りに貰っていても、とてもやりくれるものではない。寛政年間に発令された奢侈禁制を持ち出す前に、大名貸しで大店がばたばたと破産したのは江戸でも京阪でも十本や二十本の指では勘定しきれない。よほどの思惑でもなければ町人の方から武家方に近寄れるものではなかった。真砂屋はそういうことを、すでに創業の頃から気がついていたのだろうと重右衛門は感

心しているのだった。石屋の方は大名に狙われたことはないかわり享保の頃、御公儀の用人から冥加金という名目で随分と賄賂を絞りとられた。祖父の話でも作事に武家の収賄は付きものだったそうだ。

甚三郎にはそんな昔話はもう何も関係のないことだった。彼は兄の案じる大工になることを、別段に辛いとも何とも思っていなかった。どんな家に生れても長男でなければ次男三男は冷や飯喰いで、その家の財力も何もあてには出来ない。養子の口を待つのでなければ腕一本に職をつけるのが彼らの生きる手段だった。石屋の往年の栄華が、仮に甚三郎がその最中にお蚕ぐるみで育ったとしても待ち受けている運命は同じだった。商人も武士同様に家を守るためには長男だけに代を継がせ、次三男は補佐役にもさせずに冷や飯を喰わせた。分家させては本家の財産が減って、子供が多ければ元も子もなくなってしまうからであった。この点では大名といえども同じことであった。享保の頃の徳川吉宗に今も江戸で人気があるのは、彼が紀州徳川家に生れたものの元は甚三郎同様の部屋住みの冷や飯で、それが紀州家もたてつづけに長男、次男と死んでしまったところへ、江戸の将軍家も犬公方さまの跡目が二代続いて早く亡くなられ、そこで人のいないところから急遽紀州家の当主だった吉宗が公方さまの座についたからで、だから八代将軍は下情に通じておいでになったと大岡越前守と共に語り伝えられているのである。それだけ江戸には家を継げなかった男たちが武家にも町屋にも溢れていたのだろう。長男より才覚に恵まれながら後から生れてきたばかりに何もかも一から始めなければならない男たちにとって、吉宗の運のよさは憧れであった。と当時に自分たちにはやれないことを好運に支えられてやり遂げた男への拍手でも

あった。講釈師が大岡裁きを語み続けるのも背景に吉宗の人気があってこそである。

しかし甚三郎は夢のように吉宗のような幸運が自分に舞いこむことなど考えたこともなかった。吉宗自身も自分が将軍になるときがあろうとは思いもよらなかったように、まして甚三郎は武士でさえないのだ。彼は子供の頃から読み書きがよくできたが、それに増して細工事が好きであった。一時は指物師になろうかと考えたことがある。しかし甚三郎の性格は小さな道具よりも、大きな建物の方が好みにあった。まだ十二、三歳の頃に、母親に連れられて日光まで権現さまに参詣したことがあったが、そこで甚三郎の心に最も大きく刻まれた印象はといえば、細やかに華麗な東照宮の欄間の細工よりも、鶯張りの床であった。良質の木材を選んだ棟梁たちの息づかいがそこに聞えてくるようだった。あのときから大工という仕事が甚三郎の心の中に芽生えたのかもしれない。真砂屋に出入りの棟梁の中で一番気っ風のいいところを選んで、甚三郎自身が飛込んで行ったのが去年の秋である。日光へ行った母親はもう十年前に亡くなっていた。父親は年の若い後妻を迎え、三年たたずに病みついて、やがて葬式をすると間もなく甚三郎の兄である重右衛門と継母の仲が怪しくなった。今では二人はれっきとした夫婦になり、子供まで生れている。軒の傾いた石屋でも、暖簾を外さない限り、後家も継子の長男も家から出ることは思いつかず、そこで二人がくっついても誰も不思議には思わない。甚三郎だけが、なにか割切れないものを感じ、一刻も早くこの家を出たいと願った。

甚三郎に頼られた棟梁は、最初は驚いたし、引受ける以上には請人(保証人)がいる御制度なので重右衛門の書きつけを欲しがったが、重右衛門は頑として書かないものだから、甚三郎の身分

は今のところ宙に浮いている。棟梁としては彼の方も親代々の取引先である石屋の息子を、そこらの人入れ稼業から仕入れた奉公人のような扱いはできない。まあ鉋七年鋸三年という順で、節の多い粗末な材木に鉋をかける仕事からやらせてくれ、その働きぶりを見込んだのか木場に材木を仕入れに行くのも供の中に甚三郎を入れてくれるようになった。杉や檜の材質の見方を早くも甚三郎は実地に学ぶようになっている。それが甚三郎にとっては楽しくて仕方がない。

そんなところへつい一月ばかり前、重右衛門から棟梁へ手紙を持った使いがきて、大事な用ができたから甚三郎を日本橋へ戻るように言いきかせてくれろという文面だった。棟梁はその手紙をそのまま甚三郎に見せて、用が何かは書いてないが、まず兄親には逆らわない方がいい、用が済んだらいつでも戻っておいでなさいよ、と、暗に自分からは引止めようがないということを言ったのだった。甚三郎は不機嫌だったが、棟梁の立場が分るから重右衛門の言いなりに戻ってきた。大事な用というのは縁談だった。

「頼むよ甚三郎、この通りだ」

重右衛門は脅したりすかしたりした揚句、甚三郎がまるで乗り気にならないのを見てとると、最後は哀願になった。

「間に立った人の手前、お秋も俺もどうにもならないところにきてしまった。お前が見合いをしたからといって、必ずまとまる縁組みではないのだ。はっきり言っておくが一人娘に婿八人で、見合いをして断られた男の数は片手の指ではもう数えきれない。お前がうんと言ったからといって、きまる話ではないのだから、俺とお秋の顔を立てて、出かけるだけでいい。俺たちも断られ

て元々という気がある、正直な話だがね。おまけに相手は真砂屋七郎兵衛の孫娘だ。七郎兵衛さんは八代目で、息子が若死にして一人だけ残して行った血筋だから目に入れても痛くない可愛がりようだとよ。仲々あの七郎兵衛さんの眼鏡にかなうのは難しかろうよ。断られても恥にもならない。宝町の尾張屋の三男坊も断られたそうだ。あれだけ頭がきれて役者はだしのいい男が、何がいけなくって断られたのだろうと仲人口でも首を捻っているんだとよ。お前が気に入られるか、気に入られないか、誰も分りはしないのだから、お前が見合いを嫌がるのも、後になれば何でもないことになってしまう。おまけに相手の当の娘だが、あれだけの身上なら人三化七でも結構婿になり手が詰めかけようというものなのに、天二物を与えたかして、笠森おせんも敵うまいという噂の小町娘だ。七郎兵衛さんが、婿選びに減法気が強いのもそういうところで心底は孫娘を誰の持物にもさせたくないというところだろうよ。見合いというのが拘泥なら、吉原へでも出かけて行って全盛の太夫に只で初会をすると思えばいいだろう、どうだい、甚三郎、ええ」

お秋というのは重右衛門の継母で今は妻となっている女の名であった。もともとがお秋の筋からきた縁談で、お秋に頭の上らない重右衛門にとっては甚三郎が取りあわねば、その分お秋から絞られるので引くに引けない立場なのだろう。甚三郎は次第にそういう兄を気の毒にも思うようになってきた。

見合いをしては端から相手を断っている女だから、多分お前も例外でなく断られるだろうから安心して見合いをしろという重右衛門の勧め方も、考えてみれば随分と妙なものであったが、婿になりたい男の詰めかけている真砂屋の娘を、全盛の太夫とはいえ遊女に見たてるのも乱暴すぎ

て、相手には気の毒なものに思えた。

「只で初会ですかい」

甚三郎の口調がつい皮肉っぽくなってしまったのも、重右衛門に対する当てつけだったが、兄にしてみれば口が酸くなるほど説き続けて、やっと弟が返事をしたのだから、この一言にすがりついた。

「お秋と祝言してからのことだから大きな声では言えないが、俺も男だ一度でも散茶（二流の遊女）ではない太夫を買ってみたいと思って、どうせ買うなら全盛を張ってる名のある太夫を今生の思いに、へ、紺屋高尾だよ、まるで。そのときはしかし思い詰めたね。茶屋で金を撒いて揚屋の迎えを待って、揚屋から傾城屋に差紙を出させ、さあて朝から待って花魁が来たのは三時過ぎだぜ。それにしても薄墨太夫という当時の全盛だ。順が来るまで十日や二十日じゃきかなかったよ。それまでは、さんざ茶屋で金を撒いて、別の揚屋で散茶を買って順を待ったんだから間抜けを絵に描いたような話だ。そこでようやくの初会だったよ。薄墨太夫はなるほど懐月堂の絵から抜け出たように肌の綺麗な美い女だったが、初会は盃のやりとりだけで香車婆が一人で喋くって、花魁は一言も口をきかない。松の位なんてものは享保になくなったという話だが、三っつ星があるわけでもないのに、盃に口をつける真似だけして、それきりすいと立って行っちまった。話には聞いていたけれど、いざ本当に消えてしまうと俺は目がさめたね。いかに天下の薄墨太夫でも、これだけ俺が金をかけたというのに、盃だけの顔見せだけとは、あんまりだ。二会目に裏を返し、三会目で馴染みになって首尾を遂げるという手順は、俺も昔の石屋じゃあないと思ったね。貧乏

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com